

平成 21 年 4 月 17 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2005～2008

課題番号：17520168

研究課題名 (和文) 20 世紀パリのシャンソンにおける文化の交錯とアイデンティティ

研究課題名 (英文) Mixture of Cultures, and Identity on the Chansons in 20th Century Paris

研究代表者

三木原 浩 (MIKIHARA HIROSHI)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授

研究者番号：70116177

研究成果の概要：

20 世紀にあって、パリで活躍した数多のシャンソン歌手を、「パリ生まれの歌手」「フランスの地方出身の歌手」「他の言語・文化圏に属す歌手」の三ジャンルに分類し、広く概観・考察した上で、それぞれのジャンル毎の典型的歌手数名を取り上げ、その代表的シャンソンの「歌詞分析」を試みた結果、当の歌手との〈パリとのアイデンティティ〉〈パリへのコンプレックスと同化〉などが明らかになった。このことから鑑みて、シャンソンを通して見える、パリが持つ多文化世界のダイナミズムおよび普遍性は、フランス語という固有の一言語で表現され歌われることで、初めて可能になったともいえるだろう。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2006 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：シャンソン、パリ、メロドラマ、

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近過去に受けた科学研究費、その研究成果等との関連：

①基盤研究(C)② 平成 15・16 年度「メロドラマ的パラダイムと 20 世紀パリのシャンソン」(総額 180 万円)：19 世紀中を通して成

熟した「メロドラマ的思考」が、20 世紀にいかなる形で大衆の中に生き続けたかを、パリで流行した大衆娯楽の一典型シャンソンに対象を絞って分析したが、メロドラマという枠組みを補完する別のパラダイムが、シャン

ソン存在意義に深く関わっていることが判明した。つまり、パリにおける「多文化の交錯」である。

②基盤研究(C)(2) 平成 15・16 年度「近代フランスにおける都市と地方の民衆文化の諸相と文学への影響」信州大学人文学部、同農学部、神戸大学国際文化学部からの計 4 名による共同研究。総額 360 万円：フランスで歌い継がれてきた民謡の歌詞が、時代によりいかに変遷し意味合いを変えたかを明らかにし、都市文化パリとの交錯・融合を探った。

③基盤研究(C)(2)期間：平成 14・15 年度「メロドラマ的思考法と 19 世紀ヨーロッパ」、神戸大学国際文化学部、京都大学人文科学研究所、大阪教育大学のメンバー計 5 名による研究。総額 500 万円：この共同研究での三木原の役割分担は、19 世紀フランス・メロドラマの特徴的な「筋立てパターン」を見出すことにあった。

(2) 研究会、海外渡航による準備状況：

平成 14 年 12 月 1 日に発足した「シャンソン研究会」(年 2 回)で、すでに数回の研究発表会、意見交換、資料の相互利用を実践し、会報を発行した。

また、平成 15 年 9 月 27 日～10 月 14 日、及び平成 16 年 9 月 1～18 日にかけてパリに出張、国立図書館、フナック、古書店等でシャンソンの資料収集にあたったほか、いくつかの劇場で、現在のパリにおけるシャンソンの受容の実態を調査することができ、研究上かけがえのない実りを得た。

シャンソンについての歴史的研究及び実証に基づく歌詞分析を試み、以下のような著書(単著 3 冊、共著 1 冊)を上梓した。

—単著：『シャンソンの四季—フランス文化断章—』、彩流社、全 261 頁、1994 年

—単著：『シャンソンはそよ風のように』、彩流社、全 305 頁、1996 年

—共著：『フランス学を学ぶ人のために』(「そして、シャンソン……」執筆、pp.196—215)、世界思想社、1998 年

—単著：『パリ旅物語』、彩流社、2002 年

以上、科学研究費による共同研究や、研究会等における成果と密接に連動するテーマ「20 世紀パリのシャンソンにおける文化の交錯とアイデンティティ」についての研究に着手し発展・展開させる準備は、十分に整っていた。

## 2. 研究の目的

パリは、今や、かつてなかったほどの人種の坩堝となり、様々な民族・芸術・文化が混交するヨーロッパの縮図そのものになっている。一口にヨーロッパといっても、簡単に一括して説明できるものではないが、多様な民族固有の文化の純粋な形成・発展を願う熱い願望と、ヨーロッパの統合と平和に向かう強い希求との一見背反するベクトルが激突し、軋みをたてつつも、全体としては、高度な「普遍性」を持つ、ユニークな多言語・多文化世界を作り上げようとしている場であることだけは確かである。同様に、パリも、植民地時代の負の遺産も含め、多くの移民を受容し、その個々の民族性を尊重しながら、幾多の試練の中、並存あるいは共存し、独創的な「普遍的都市文化」形成へと向かいつつある。

この研究は、一つの統合体として見たパリの文化のアイデンティティは一体どこにあるのか、そして、そのアイデンティティと、パリが受容し、刻々次世代を懐胎しつつある多様な民族の民族意識とのあいだにどのような関係が存立しているのかを、「シャンソン」をキーワードに、主に「歌詞分析」を通して、フランス文化・社会の一端を浮かび上げらせ、同時代の民衆の心性を明らかにしようとするものである。具体的には、以下の通りである。

(1) 活躍の舞台がパリであり、尚且つ、①

パリ生まれのシャンソン歌手たちのパリとのアイデンティティ、②フランスの地方出身のシャンソン歌手たちのパリへのコンプレックスと同化、③他の言語・文化圏の生まれで、本来外国語であるフランス語を駆使してのシャンソン歌手たちの文化的越境・融合、この三つの問題に焦点を絞り、いったん幅広く考察したのち、①②③のそれぞれに典型的な歌手を抽出し、その代表歌を分析することで、論点を明らかにしたい。そして、最後にこの三点①②③を交差させることで、パリが持つバランスのよい「普遍的都市文化」は、多文化世界のダイナミズムを、フランス語という一言語に集約し表現することで生み出されてきた、ということまでを明らかにしたい。

(2) 広く「大衆文化」として認知された「シャンソン」をキーワードとすることで、「高尚な芸術」だけでは見えてこない、パリにおける多文化世界の交錯・融合・同化の様相が、葛藤を伴って浮き彫りにされてくるだろうが、それは国際化の中を生きねばならない日本人の私たちに、広い視野と豊かな知恵をもたらし、共存への道を探りうる縁となるだろう。

(3) 20世紀以降のシャンソンの学究的な研究は、歌詞・作曲・歌手のいずれの領域においても国内外ともに不十分で、ピエール・サカ、マルク・ロビーヌ他少数を数えるのみである。ましてや、パリを舞台に「シャンソン」をキーワードに多文化、民族意識等について本格的に考察した例は、まだない。21世紀の未来を、人類が一つの共同体として生き延びる道を、この研究により、ささやかでも提示できるとすれば、国際文化学に新たな一ページを画することができるだろう。

### 3. 研究の方法

「シャンソン」がキーワードなので、まずシャンソン歌手の出自・生い立ち・生涯等について広く考察した上で、代表歌の歌詞を分析

する。方法は以下の通り。

#### (1) パリの民衆史関係の資料収集

パリを通時的に見た場合の、文化の「輻輳的な」生い立ち、且つ現在の「豊穡な」内実を概観しておく必要がある。そこで、パリの文化史・社会史に関する文献・資料・研究書を、原著、翻訳をふくめて、内外から広範に収集する。

#### (2) シャンソン関係の資料収集

①シャンソンの「正しい歌詞」の入手・確認作業：20世紀を通して、ある時期のパリで流行り、パリの民衆の支持を得、ときにエポックメイキングな社会現象として、シャンソン史のみならず、パリの歴史に刻印された数々のシャンソンの「正しい歌詞」を収集すること。最近では、例えばシャルル・トレネや、セルジュ・ゲンスブール、ジョルジュ・ブラッサンス、ジョルジュ・ムスタキなどのように、かなり校訂のしっかりした歌詞集も出版され始めたが、できれば楽譜のコピーを入手することが望ましい。

②伝え手としての「歌手」の選別作業：シャンソンは、歌われ、聴衆の共感を得て初めて、巷間に広がり、ついには市民権、ひいては生存権を得る。必ずや伝え手としての「歌手」が、仲立ちとして存在している。なかには、上記4人のように、作詞・作曲・歌手の三役兼任という場合もある。内発的なメッセージを言葉に託して歌詞に表現すること、次にそのメッセージにもっとも相応しい曲想を楽譜に定着すること、さらにその両者の幸福な結婚を創造的歌唱のなかに実現すること、これら三つを、ひとりの人間が成就出来るとすればそれが最も望ましい。この研究の中心に、先ずはそうした卓越したシンガーソングライターを配置するつもりである。

③作詞・作曲は委託の歌手：エディット・ピアフのように、ひとたび歌唱表現のステージ

に移行したとたん、作詞者・作曲者の思いを遙かに超えて、その歌世界を見事に開示してみせる秀逸な歌手が存在する。また淡々と美しいフランス語で語りかけるように歌うコラ・ヴォケールも素晴らしい。こうした歌手が、献呈されて、あるいは自ら選別して歌うシャンソンには、必ずや歌手自身の思想・生き方が投影されているはずなので、歌詞の検討と共に、生い立ち、生涯などを考察する必要がある。そのための、文献・資料・図書を収集し、そのうえで、本テーマに合致する典型的なシンガーソングライター、あるいはシンガーを選別し、作品と生涯の形で検討する。

以上、①②③に関して、フランス国立図書館、FNAC、古書店等、多岐にわたる文献・資料の収集、CD、DVD、ビデオ等の購入、及び現存の舞台（大小の劇場、シャンソン酒場等）の現状視察に、海外渡航調査は不可欠である。

### （3）歌手の出身地による分類と考察

パリのシャンソンに表象された文化の交錯とアイデンティティを問題とすると、当然、シャンソン歌手の出身地（国籍を含む）は重要である。細分化は避け、次のように大きく三つに分類する。

①パリ生まれのシャンソン歌手が、シャンソンを歌うときのパリの文化とのアイデンティティ、特に「パリ賛歌」のシャンソンを歌うときのアイデンティティ。ここから、良くも悪くも純粋なパリの文化の独自性が抽出できるだろう。この場合、すでにシャンソン史に確たる位置を獲得していて、しかも他のシャンソン歌手にも影響を与えた歌手のみに絞りたい。エディット・ピアフ等だ。

②フランスの地方出身のシャンソン歌手で、後年パリに上って成功した「おのぼりさん歌手」のパリに対するコンプレックスと共感を押し量ることで、フランス人でありながら、

パリ及びパリ文化を特別視せざるを得ない心性が浮かび上がるだろう。意外な、興味深い結果がでるかもしれない。対象として、ジョルジュ・ブラッサンス（セート生まれ）等だ。

③他の言語・文化圏から越境してきたシャンソン歌手で、母語ではない、本来外国語であるはずのフランス語を駆使してシャンソンを歌い、パリで成功した歌手の、文化的越境・葛藤・融合の程度のあり具合を検討する。本テーマの趣旨からすれば、もっとも重要な歌手たちで、イタリア生まれのイヴ・モンタンやサルヴァトーレ・アダモ、ブルガリア生まれのシルヴィ・ヴァルタン、カナダ生まれのセリーヌ・ディオーン等、枚挙にいとまがない。

## 4. 研究成果

本研究は、大都会パリにあって、「文化的統一体としてのアイデンティティ」及び「諸民族が齎した諸文化の交錯」という背反する二面が、いかに調和を達成せんとしているかを、典型的な民衆芸術・民衆文化のひとつである「20世紀パリで流行ったシャンソン」をキーワードに、幅広く具体的に検討しようとしたものである。そこでの方法は、シャンソン歌手の出自・生い立ち・生涯・時代背景等の〈外堀の考察〉に留めることなく、むしろ重点を、〈内堀の考察〉、——つまりは、「歌詞分析」、——に置いた。選ばれた才能のある歌手が、ある特定のシャンソンを十八番とするからには、そこに、特別な理由があるだろう、との予測に基づいてのことだ。同種の発想による研究は、日本・フランス双方に見あたらない。本研究に独創性があるとするれば、この点だろう。時間をかけて考察したシャンソン歌手及び歌詞は余りに多岐に及ぶので、本科研期間の4年間に論考として実際に執筆した歌手及びシャンソンに限って列挙する。

(1) パリ生まれのシャンソン歌手：最初からパリで活躍、パリへの愛着は強い。

①エディット・ピアフ：世界的な歌手になったが、最後はパリのペール・ラシェーズ墓地に祀られている：『ミロール』（作詞：ジョルジュ・ムスタキ、作曲：マルグリット・モノー）。『見知らぬひと』（作詞：ロベール・マルロン、作曲：マルグリット・モノー）。『ええ、わたしにはなんの後悔もないわ』（作詞：シャルル・デュモン、作曲：ミシェル・ヴォケール）

②フレール：海外への逃避の後再びパリへ戻る。望郷強し：『あれは、いったいどこ？』（作詞：リュシアン・カロール、アンドレ・ドゥケイ、作曲：ヴァンサン・スコット）。『ラジャヴァ・ブルー』（作詞：ジェオ・コジェール、作曲：ヴァンサン・スコット）。『パリを思えば』（作詞：ミシェル・ヴォケール、作曲：ミシェル・ヴォケール、シャルル・デュモン）。『モンマルトルに帰って』（作詞：ミシェル・ヴォケール、作曲：ジョルジュ・ヴァン・パリ）

③フランソワーズ・アルディ：知的な根っからのパリジェンヌ：『あなたにどんな風にお別れをいえばいいの』（作詞：セルジュ・ゲンスブール、作曲：ジャック・ゴールド、アルノルド・ゴラン）。

④リュシエンヌ・ドゥリール：下町のパリジェンヌ、モンテ・カルロ中心に幸福な結婚生活、ボビノに出演中倒れる：『聖ヨハネ祭のあたしの恋人』（作詞：レオン・アジェル、作曲：エミール・カララ、歌唱：リュシエンヌ・ドゥリール、パトリック・ブリュエル）

(2) フランスの地方出身のシャンソン歌手：当然、パリへの共感と望郷の間で揺れる。

①コラ・ヴォケール：ボヘミアンたちの自由な芸術村だったモンマルトルへの愛情が強い、十代後半でとび出した故郷マルセイユへ

の思いはインタビューでは語られているが、実際には余りないだろう：『モンマルトルの丘の哀歌』（作詞：ジャン・ルノワール、作曲：ジョルジュ・ヴァン・パリ）、『白いバラ』（アリスティッド・ブリュアン作詞作曲）

②ジョルジュ・ブラッサンス：パリで最高級の評価を得ていながら、故郷セートへの望郷の念は強く、自作シャンソンのなかで、早くから墓地をセートと決めていた：『嘆願書、セートの浜辺に埋葬されたし』、『娼婦達の哀歌』『ジャンヌ』『ジャンヌのアヒル』『オーヴェルニュ人に捧げる歌』『ゴリラ』（作詞作曲：ジョルジュ・ブラッサンス）、『雨傘』（作詞作曲：ジョルジュ・ブラッサンス）

③ティノ・ロッシ：情熱の故郷コルシカへの思い、パリで成功するのに活用：『おお、コルシカ、愛の島よ』（作詞：ジェオ・コジェール、作曲：ヴァンサン・スコット）、『街路に雨が』（作詞作曲：ヘンリー・ヒンメル、仏語歌詞：ロベール・シャンフルリ）

(3) フランス以外の国で生まれたシャンソン歌手：国境を越えてパリにくることを余儀なくされた体験から、良くも悪くも、まずは普遍性を獲得。ただ、根っからパリに同化したかに見える歌手と、改めてパリから逃避した歌手とに、二分されるようだ。

①ベルギー生まれのイヴォンヌ・ジョルジュ：ベルギーからパリへ、成功、病氣と失意のままスイスからイタリアへ：『ヴァルパライソ（バルパライソ）』（作詞作曲不祥）

②ブルガリア生まれのシルヴィ・ヴァルタン：故郷からパリ、パリから故郷、そして世界：『ラ・マリッツァ』（作詞：ピエール・ドラノエ、作曲：ジャン・ルナール）②『私の父』（作詞：マロリー、作曲：ブノワ）

③カナダ生まれのセリーヌ・ディオーン：フランス語への自負、英語との共生で普遍性：『あなたがあたしを愛してくれますように』（作

詞作曲：ジャン・ジャック・ゴールドマン)

④ イタリア生まれのイヴ・モンタンとサルヴァトーレ・アダモ：イタリア訛りから美しいフランス語へ、パリへの同化：『ミンクのコートのマリー』（作詞：ロジェ・ヴァルネ、作曲：マルク・エイラル、歌唱：イヴ・モンタン）、『海のマリー』（作詞作曲歌唱：サルヴァトーレ・アダモ）。

地方からパリに上る時、国境を越えてパリに入る時、パリという文化的土壌の中で、いかなる葛藤があったか、いかに折り合いをつけたか、あるいはつけることができなかつたかを、歌手の実人生と作品（歌詞）の照応関係から、プラス面であれマイナス面であれ、今後も考察・検討を続けねばならないだろう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 三木原浩史著「シネマ『カスク・ドール』論——娼婦、または聖女の恋のメロドラマ」クインテット（クインテット刊行会）、査読無28号、2008年、11—25頁

② 三木原浩史著「シャンソン『ひとりの少女』をめぐって」、近代（神戸大学近代発行会）、査読無、98号、2007年、51—77頁

③ 三木原浩史著「ピアフ、またはことばの風景」、クインテット（クインテット刊行会）、査読無、27号、2007年、23—42頁

④ 三木原浩史著「シャンソン『モンマルトルの丘の哀歌』—月光のハーモニー〈サン・ヴァンサン通りをのぼりつめたところで〉—」、近代（神戸大学近代発行会）、査読無、97号、2006年、41—77頁

⑤ 三木原浩史著「止めて！止めて、音楽を！—シャンソン『アコーディオン弾き』をめぐって—」、クインテット（クインテット刊行会）、査読無、26号、2006年、35—58頁

⑥ 三木原浩史著「ジョルジュ・ブラッサンスの『嘆願書、セートの浜辺に埋葬されたし』—反転のハーモニー〈終着駅はセート駅だ〉—」、近代（神戸大学近代発行会）、査読無、96号、2006年、81—125頁

⑦ 三木原浩史著「シャンソン『ひとりの男が待っていた—ピエロの孤独—』」、近代（神戸大学近代発行会）、査読無、95号、2005年、123—147頁

⑧ 三木原浩史著「ぼくの感動的な恋—パントマイムの恋のメロドラマ—」、国際文化学研究（神戸大学国際文化学部紀要）、査読無、24号、2005年、41—58頁

⑨ 三木原浩史著「リヒャルト・シュトラウスのオペラ『サロメ—7枚のヴェールの踊り』」、近代（神戸大学近代発行会）、査読無、94号、2005年、41—65頁

〔学会発表（研究会発表）〕（計2件）

① 三木原 浩：「ジョルジュ・ユルメール『ひとりの男は待っていた』」、第5回シャンソン研究会、2005年5月27日、信州大学人文学部4階401演習室

② 三木原 浩：「アリアは伝説の調べ」、第9回シャンソン研究会、2007年5月18日、信州大学人文学部講義棟3階第4講義室〔図書〕（計3件）

① 三木原浩史著、彩流社『シャンソンのメロドラマ』、2008年、285頁

② 三木原浩史著、彩流社『シャンソンのエチュード』、2005年、234頁

③ 三木原浩史著、彩流社『改訂増補・シャンソンの四季』、2005年、296頁

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木原 浩 (MIKIHARA HIROSHI)  
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授  
研究者番号：70116177

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者